

はじめての保育実習に臨む学生への  
不安軽減を目指した取り組みについて  
赤ちゃんを模擬的に体験する実践からの提言

The Initiative that Aims at Reducing Anxiety of the Students  
Who Take Part in Childcare Internship for the First Time  
Recommendations from Simulated Experiences with Babies

塩 見 一 成

SHIOMI Kazunari

【要約】

学生がはじめての保育実習に臨む前に、赤ちゃんとの関わりに不安を感じることもある。この不安を軽減するため、赤ちゃんを模擬的に体験する授業を実践した。赤ちゃんの世界を模擬的に体験した結果、学生の赤ちゃんへのイメージがより肯定的へと変化し、より共感的に捉える力が向上し、赤ちゃんに対する理解も深まった。この取り組みは、実践的なアプローチを通じて学生が模擬的に赤ちゃんの世界を体験することで、保育実習に自信を持って臨む手助けとなることが示唆された。

キーワード 保育実習 不安軽減 赤ちゃん 体験

I、はじめに

保育者養成校として、本学では保育士を目指す学生と日々精進しているのだが、保育実習が近づくにつれて学生からは実習に対する不安の声を耳にする。実習に対して不安を抱く学生は本学特有の出来事なのであろうか。鈴木・中本（2005）の調査では、1年時の実習前には100%の学生が不安を感じていると報告しており、東ら（2003）の調査結果では「9割以上の実習生が活動内容に何らかの不安を抱いていた」としている。

指定保育者養成施設では「保育実習実施基準」に基づいて保育実習をすることが求められ、学生は保育士資格取得のために養成校を離れ、「保育実習Ⅰ」においては保育所10日間、施設10日間、さらに選択必修科目として「保育実習Ⅱ」または「保育実習Ⅲ」において、保育所もしくは施設における実習10日間が必要となる。1年生では「保育実習Ⅰ」で、多くの学生が初めて保育コースの実習を体験することになるのだが、実習前の学生からは、「赤ちゃんに関わるのが怖い」、「赤ちゃんに触れたことがない」、「赤ちゃんに何かあったらどうしよう」という不安の声が多数寄せられた。赤ちゃんの何が怖いかの問いには、「なぜ泣いているのかわからず対応できない」、「授業で学んだSIDS（乳幼児突然死症候群）などがあ

り、自分の責任で何か起こってしまったらと考えると関わるのが怖くなる」など、未知なるものへの恐怖心を抱いていることが読み取れた。

ヒトの赤ちゃんは生後すぐには一人では動くこともできず、生存することは難しい。勝木らによれば、ポルトマンは「一般に高等動物ほど胎児期が長い、したがって人間はもう 1 年近く胎内期間が長いはずである。」とし、生理的早産としての子宮外胎児説を説いたことからわかるように、ヒトの赤ちゃんは生まれてからしばらくはヒトの関与なしに生存することが厳しいのである。生後間もない赤ちゃんは 17 時間前後が睡眠時間とされる。生まれて数か月の視力は 0.02 程度とされ、首を動かすことができないことから視界はかなり限定される。やがて首がすわり、物を目で追う見る遊び、そして指で握る遊びと成長して行き、4 か月を過ぎる頃からは寝返りがはじまり、自分の意志で身体を動かすことができはじめる。その後、腹這いからハイハイへと進み、活動する範囲も広がり、やがてつかまり立ちからつたい歩きへと発展し、ついに歩き出きだす。(田中伸介 2009) つかまり立ちができるまでは、赤ちゃんの視線は床とほぼ同じ高さであり、首が座らずに仰向けに寝ている状態では、自分のすぐ横の状態さえ理解できないのである。この成長過程を順に体験することは、我々が日常での生活で忘れ去り気付かなくなった大切な事柄を思い出させてくれるのではないだろうか。

近代の核家族化した社会環境では、昭和初期のような大家族で老若男女が一つ屋根の下で暮らしていた時代とは異なり、乳幼児から高齢者までといった幅広い年齢層との交わりが希薄になってきたと考えられる。また、近年の少子化による子どもの数の減少は、学生自身が幼い子どもや赤ちゃんに触れ合う機会を減少させていると考える。このように、赤ちゃんとの関わりが必要でありながら、実際には赤ちゃんに関われていないことからくる不安が、保育実習に対する不安要因の一つになっていると考えられる。

身体の成長とともに感覚器も発達し、五感と呼ばれる感覚機能が向上していく。ここで一つ注目したい感覚に五感を総動員して感じとる「気配」<sup>注1)</sup>がある。幼児は親が近くにいることで安心してすやすやと眠りにつくが、近くに親の気配が感じられなくなると目を覚まして泣いて親に存在を知らせることがある。この「気配」についてスポーツ運動学では身体知の一つである重要な要素として捉えている。バスケットやサッカーなど、フィールドの 360 度をフルに活用するようなスポーツでは、味方や相手の存在を目視無しでも感じとりプレーする場面があり、このような経験をしたことのある人もいるだろう。個人差はあるが、赤ちゃんにもこの人の「気配」を感じとる力があるのではないだろうか。赤ちゃんが眠りについたと、安心してその場を離れた途端、急に赤ちゃんに泣かれた経験を持つ人は少なくないだろう。ここで不安を軽減させる取り組みとして、赤ちゃんの発育発達を知ることはもちろん、実際に自分の身体を赤ちゃんと同じような状況に置くことで、赤ちゃんの世界を体験できて共感することはできないだろうか。我々のように自由に動くことができない赤ちゃんがどのような思いを抱えているのか、そしてどのように訴えているのかを体験することで、少しでも共感的に赤ちゃんを捉える力の向上につなげたいと考えた。

そこで、本研究では、嶋野・塩見（2023）で発表した内容をさらに進めて、保育実習前に学生が赤ちゃんに抱く不安を少しでも軽減するための取り組みとして、学生自身が伏臥位・座位・ハイハイ・歩行などの赤ちゃんの成長段階を模擬的に体験する。この体験から、赤ちゃんの発達過程における感覚や思いに気づき、赤ちゃんの視点で世界を捉えることで、より共感的に赤ちゃんを捉える力を向上させることを目的に授業を実践した。そして、授業と実習を通しての学生からのコメントから、本研究の取り組みが及ぼす赤ちゃんに対する不安軽減について検証した。

## II、研究方法

### 1、対象

本学幼児教育学科 2023 年度 1 年生 84 名

### 2、実施期間

実施期間：2023 年 10 月下旬～11 月中旬

授業実施日：2023 年 10 月 23 日（月）

実施場所：富山短期大学 G 館体育館

アンケート調査の実施：2023 年 10 月 23 日（月）・2023 年 11 月 16 日（木）

### 3、調査方法

10 月 23 日「子どもの運動」の授業時間 1 コマ（90 分）を使い、赤ちゃんの成長段階を実体験し、赤ちゃんの視点で世界を捉える体験をする。通常の「子どもの運動」の授業と同じように、運動ができる服装に着替えて体育館で実施した。

研究の流れを表 1、授業計画を表 2 に示す。

表 1 赤ちゃん体験研究：研究の流れ

2023 赤ちゃん体験研究（2023. 10. 23 実施）	
◎ 研究の流れ	
①-1	学生の赤ちゃんのイメージについて測定（ <u>授業前アンケート</u> ）：10/23 授業内
①-2	赤ちゃん体験授業（10/23：3・4限）
①-3	学生の赤ちゃんのイメージについて測定（ <u>授業後アンケート</u> ）：10/23 授業内
①-4	授業後の感想（ <u>自由記述</u> ）：10/23 授業内
②-1	保育実習 I-1（未満児実習の体験）
②-2	実習後の感想（ <u>自由記述</u> ）：11/16 授業内
③ 本研究（実践）の意義・効果について検証及び考察	
I：イメージの比較（アンケート）	
①-1, ①-3	
II：変化に関する考察（自由記述）	
①-4, ②-2	

表 2 授業計画（「子どもの運動」：1 年生 3・4 組の学生対象）

2023. 10. 16(月) 子どもの運動 [3・4限] 授業計画			
◎タイムテーブル			
3 組	4 組	時間	内容
13:10～	14:50～	10分	整列、出席確認、各班による準備体操
13:20～	15:00～	10分	本時の内容説明
			アンケート入力 ①-1
			ペアリング、立場の違いによる受取り
13:30～	15:10～	15分	4つの姿勢の体験（3分程度）
13:45～	15:25～	5分	感じたことを入力
13:50～	15:30～	15分	4つの姿勢の体験（3分程度）
14:05～	15:45～	5分	感じたことを入力
14:10～	15:50～	10分	最後のアンケートに入力 ①-3、①-4
14:20～	16:00～	5分	振り返りとまとめ

### （1）アンケート調査

#### 1)、赤ちゃんイメージに関するアンケート

赤ちゃんを模擬的に体験する授業（以後の文では、「赤ちゃんを模擬的に体験する授業」を「体験授業」と記す。）のはじまりと終わり、そして実習終了後の最初の授業で「赤ちゃんイメージに関するアンケート（Google Form）」（花沢 1992）にそれぞれ回答する。

#### 2)、体験授業終了後に、赤ちゃんに関する感想を自由記述する。

自由記述では、学生自身が赤ちゃんを体験しての感想を自由に記述する。いつもより低い視線、狭い視野、自由に身体を動かすことができない状況、大きな声を出して親役を呼べないなど、通常の生活とは異なる体験が感覚を研ぎ澄まさせ、周囲の気配をより感じ取ろうと努めさせていると考えられる。これらの、普段の日常の生活では感じ取れない気づきや発見についても詳細に記述する。

3)、保育実習 I が終了してからの最初の授業で、今回の取り組み（赤ちゃん）についての感想をアンケートに回答し、自由に記述する。

### 倫理的配慮

参加者全員に、アンケートはこの研究のみに使用すること、個人が特定されないことがないこと、アンケートに不参加でも不利益を被らないことを丁寧に説明し、学生の自由意思で協力できる者のみで回答を得た。

### （2）授業の流れ

#### 1)、事前に二人組を設定し、学生は赤ちゃん役と親役のどちらも体験する。

赤ちゃんの模擬的な体験の進め方は前半・後半の 2 回に分けて実施し、前半に赤ちゃん役の子は後半には親役とし、両方の立場を体験する。

#### 2)、赤ちゃんの成長に合わせて伏臥位、座位、ハイハイ、歩行の 4 つの姿勢運動発達の段

階を設定し、順番に進めていく。(表 3 参照)

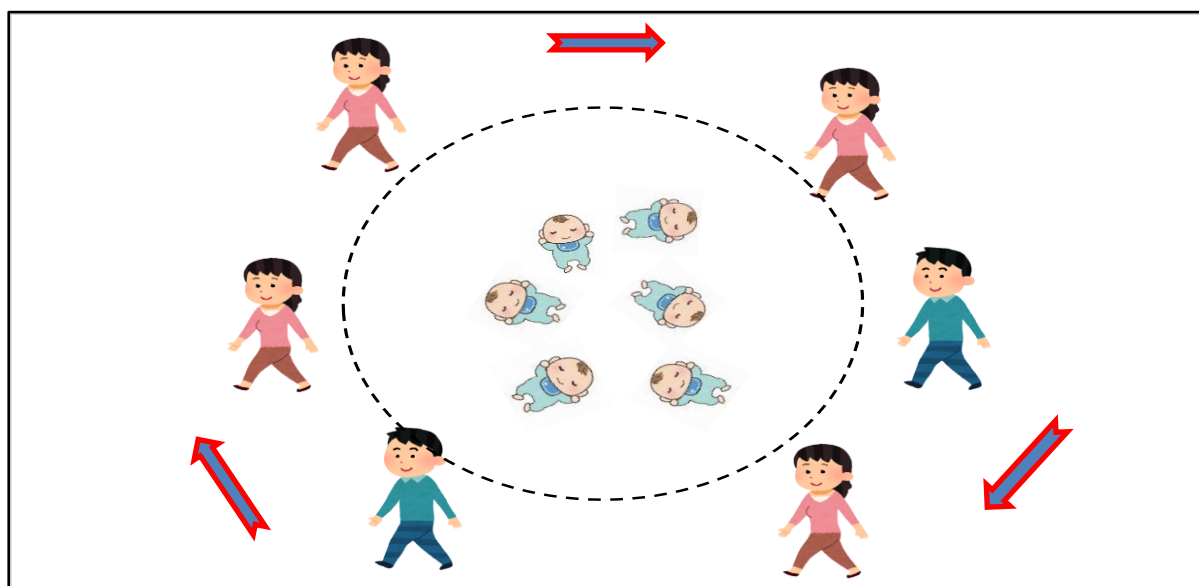
赤ちゃん役は半径 7 メートルのサークル内、親役はサークル外に位置する(表 4 参照)。親役は合図とともに時計回りに声を出さずに静かにサークルの外側を移動する。親役は自分の赤ちゃんの呼ぶ声を注意深く聴き取り、自分の赤ちゃんの声に気付いたら赤ちゃんに近寄っていく。

赤ちゃん役は指定された行動(活動)の中で、精一杯の力で自分の親に自分の居場所を知らせ、見つけてもらうことに全力を注ぐ。

表 3 赤ちゃん役・大人役の各々の動きについて

◎制限のある動き					
姿勢	動きの制限	ことばの制限	要求	伝え方	関わり方(大人役)
仰向け ※ 移動なし	首: 動かせない 腕: 動かせない(脇にくっつける) 足: 動かせない ※ 手首、足首のみ可 ※ ほぼ目の動きのみ	ことば なし ※ 声(音)について 口を閉じての発生のみ可	・ 気付いて欲しい(お腹がすいた、おむつ、うんちなどの気持ち) ・ 見つけて欲しい ※ 要求を出し続ける	制限のある中で精いっぱい伝える	赤ちゃんを理解するためにどのように働きかけるのか
お座り ※ 移動なし	移動できない ※ 上半身だけの動き可 方向転換なし ※ 前を見て、首と腕の動く範囲のみ可	ことば なし ※ 声(音)について 口を閉じての発生のみ可	・ 気付いて欲しい(お腹がすいた、おむつ、うんちなどの気持ち) ・ 見つけて欲しい ※ 要求を出し続ける	制限のある中で精いっぱい伝える	赤ちゃんを理解するためにどのように働きかけるのか
ハイハイ ※ どこへ移動しても良い	移動可(方向転換、近づく離れる) 見つける動き可 周りを見ることができる	ことば なし ※ 声(音)について あ・うなどの言葉ではない発生のみ可	・ 気付いて欲しい(お腹がすいた、おむつ、うんちなどの気持ち) ・ 見つけて欲しい ※ 要求を出し続ける	制限のある中で精いっぱい伝える	赤ちゃんを理解するためにどのように働きかけるのか
歩く ※ どこへ移動しても良い ※ よちよち歩き(1歩ごとに2秒かける歩幅は肩幅以内)	移動可(方向転換、近づく離れる) 見つける動き可 周りを見ることができる 指さし可	ことば なし ※ 声(音)について 単語のみ発生のみ可	・ 気付いて欲しい(お腹がすいた、おむつ、うんちなどの気持ち) ・ 見つけて欲しい ※ 要求を出し続ける	制限のある中で精いっぱい伝える	赤ちゃんを理解するためにどのように働きかけるのか

表 4 赤ちゃん役・大人役の配置



#### 4、分析方法

体験授業前・後と実習後のアンケート調査による学生の赤ちゃんへのイメージの変化と、体験授業後と実習後の自由記述の内容から、学生の赤ちゃんに対する不安軽減に役立ったかを検証する。

「赤ちゃんイメージに関するアンケート」については、花沢（1992）の対児感情評定尺度を用い、形容詞ごとに得点化して授業前後の変化を分析した。調査は花沢（1992）に従い、肯定的イメージ（接近群）の形容詞「あたたかい・うれしい・すがすがしい・いじらしい・しろい・ほほえましい・ういういしい・あかるい・あまい・たのしい・みずみずしい・やさしい・うつくしい・すばらしい」の 14 個、否定的イメージ（回避群）の形容詞「よわよわしい・はずかしい・くるしい・やかましい・あつかましい・むずかしい・てれくさい・なれなれしい・めんどくさい・こわい・わずらわしい・うっとうしい・じれったい・うらめしい」の 14 個、合計 28 個の形容詞について調査した。調査後に学生から、「赤ちゃんに対して『あかるい』とはどのようなイメージですか？」など、アンケートで使用した形容詞について、イメージが湧かない、あるいはイメージすることが難しい言葉があったとコメントが寄せられたため、本稿では学生がイメージして気持ちを伝えやすいと考えられる形容詞 10 個（肯定的イメージ（接近群）5 個、否定的イメージ（回避群）5 個）を選出して分析した結果を報告する。本来ならば、一般的に行われていた方法論を踏襲すべきであるが、本稿ではあえて改変することで、今の学生の赤ちゃんへのイメージを正確に汲み取ろうと試みた。

イメージに関する言葉は「赤ちゃんイメージ」を参考に、「いじらしい・ほほえましい・たのしい・うつくしい・すばらしい」の肯定的（接近）形容詞の 5 個、「よわよわしい・くるしい・むずかしい・わずらわしい・じれったい」の否定的（回避）形容詞の 5 個の合計 10 の言葉について分析した。回答は、非常にその通り（3 点）、その通り（2 点）、少しその通り（1 点）、そんなことはない（0 点）として集計した。

- 1)、体験授業前・後に実施したアンケート調査による学生の赤ちゃんへのイメージの変化を分析する。
- 2)、体験授業後と保育実習終了後に実施したアンケート調査による学生の赤ちゃんへのイメージの変化を分析する。
- 3)、授業後の自由記述から、学生が何を感じてどのようなことを考えたのかを分析する。
- 4)、保育実習終了後の自由記述から、学生が何を感じてどのようなことを考えたのかを分析する。

### Ⅲ、結果と考察

#### （1）赤ちゃんのイメージの変化

- 1)、体験授業前・後に実施したアンケート調査による学生の赤ちゃんへのイメージの変化  
10 月 23 日、当日の授業参加者は 84 名。学生の回答の授業前後での平均値と標準偏差、および授業前後での差について、対応のある t 検定（自由度 = 81）を行った結果を表 5 に示

す。欠損値のあるもの等を除いてデータを整理したところ、有効回答数は 82 となった。

表 5 体験授業前・後の赤ちゃんイメージの平均と標準偏差および有意差検定の結果

赤ちゃんイメージ	授業前		授業後		有意差検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t 値	
形容詞：肯定的（接近）						
いじらしい	0.61	0.79	1.01	1.09	-3.25	*
ほほえましい	2.97	0.22	2.59	0.76	4.22	
たのしい	2.40	0.85	2.14	0.90	2.61	*
うつくしい	1.87	0.88	1.56	1.07	2.65	**
すばらしい	2.41	0.79	2.03	1.01	2.97	*
総合	2.05	0.71	1.87	0.97	1.25	
形容詞：否定的（回避）	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t 値	
よわよわしい	2.12	0.85	2.14	0.94	-0.25	
くるしい	0.34	0.59	1.23	0.99	-6.82	
むずかしい	2.04	0.90	2.16	0.93	-1.11	
わずらわしい	0.33	0.60	0.59	0.84	-2.80	**
じれったい	0.72	0.84	1.28	1.06	-4.18	
総合	1.11	0.76	1.48	0.95	-2.33	

( $p < 0.05^*$ ,  $p < 0.01^{**}$ )

肯定的な形容詞については授業前後で「いじらしい」以外はポイントが低下した。

「いじらしい」「ほほえましい」「たのしい」「うつくしい」では、有意差が見られた。

否定的な形容詞では全ての項目でポイントが上昇した。

「わずらわしい」のみ有意差が見られた。

学生の赤ちゃんへのイメージは、肯定的な質問に対して 6 割以上、否定的な質問に対して 5 割以下が回答していることから、学生の多くが赤ちゃんを肯定的に捉えていると言えよう。

2)、表 4 の授業前後で、肯定的なイメージが低くなる理由と赤ちゃんへの理解について

赤ちゃんが普段体験している心象世界を学生が自身で体験した結果、自分が体験した赤ちゃんの世界をどのように捉えたのか、また、赤ちゃんという存在そのものに対して学生自身が客観的に見たイメージがどう変わったかについて述べる。

赤ちゃんが普段体験している心象世界を学生が自分自身で体験することにより、自身が体験した世界をどのように感じたかが、自由記述に述べられている（(2) 体験授業後の学生の自由記述参照）。仰向けで寝ている時の感じ方や気づきの違いについては、天井しか見えない、視野が狭く、視線が低い、お母さんが見えなくて不安、動きたくて苦しいなど、自分が体験した赤ちゃんの心象世界を怖いものとして感じているように考えられる。これは、赤ちゃんのことを怖いと感じていた学生が、赤ちゃんの世界を体験した結果、「赤ちゃん自身が心象体験として怖いと感じている」ということを自分で納得したことにより、赤ちゃんに対するイメージに変化があったと考えられる。つまり、授業前では赤ちゃんそのものが怖いと感じていた学生が、赤ちゃんの心象世界を体験することで、実は赤ちゃんは怖い思いをして日々を過ごしているんだということを理解したと考えられる。その結果、外の世界から何

となく赤ちゃんはほほえましいと感じていた学生のイメージが、赤ちゃんを模擬的に体験したことで、実は赤ちゃんは大変な思いをしているということに気付いたのではないだろうか。つまり、この体験から、赤ちゃんが大変な思いを抱えて毎日を過ごしているということに学生が気付き、赤ちゃんの立場や大変さがよりよく分かるようになったと考えられよう。

### 3)、体験授業後と保育実習終了後に実施したアンケート調査による学生の赤ちゃんへのイメージの変化

11月16日、当日の授業参加者は82名。学生の回答の授業前後での平均値と標準偏差、および授業前後での差について、対応のあるt検定(自由度=80)を行った結果を表6に示す。欠損値のあるもの等を除いてデータを整理したところ、有効回答数は81となった。

肯定的な形容詞については授業後と実習後では、「いじらしい」「すばらしい」でポイントが低下した。

「ほほえましい」「たのしい」「うつくしい」ではポイントが上昇し、「ほほえましい」「うつくしい」では有意差が見られた。

表6 体験授業後と実習後の赤ちゃんイメージの平均と標準偏差および有意差検定の結果

赤ちゃんイメージ	授業後		実習後		有意差検定	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t 値	
形容詞：肯定的(接近)						
いじらしい	1.01	1.09	0.65	0.85	-0.27	
ほほえましい	2.59	0.76	2.81	0.52	-2.20	*
たのしい	2.14	0.90	2.68	0.54	-4.50	
うつくしい	1.56	1.07	2.04	1.02	-2.92	**
すばらしい	2.03	1.01	0.33	0.68	13.79	
総合	1.87	0.97	1.70	0.72	0.39	
形容詞：否定的(回避)						
よわよわしい	2.14	0.94	1.75	0.96	2.63	*
くるしい	1.23	0.99	0.46	0.69	5.86	
むずかしい	2.16	0.93	2.30	0.73	-1.04	
わずらわしい	0.59	0.84	0.35	0.57	2.50	*
じれったい	1.28	1.06	0.84	0.84	2.96	**
総合	1.48	0.95	1.14	0.76	2.29	

( $p < 0.05^*$ ,  $p < 0.01^{**}$ )

否定的な形容詞では、「むずかしい」以外はポイントが低下した。

「よわよわしい」「わずらわしい」「じれったい」では有意差が見られた。

赤ちゃんの世界を体験することで赤ちゃんへの理解が深まったこともあり、実習ではこれまでに抱いていた不安が軽減されて、赤ちゃんと関わる事ができた結果と考えられよう。



#### 4)、実習後のアンケート調査

アンケート調査は、「赤ちゃん体験の授業は、実習で赤ちゃんに関わる上で不安を減らすために役立ちましたか。」という質問に、「とても役に立った・まあ役に立った・どちらともいえない・役に立たなかった」で回答を求めた（図 1 参照）。

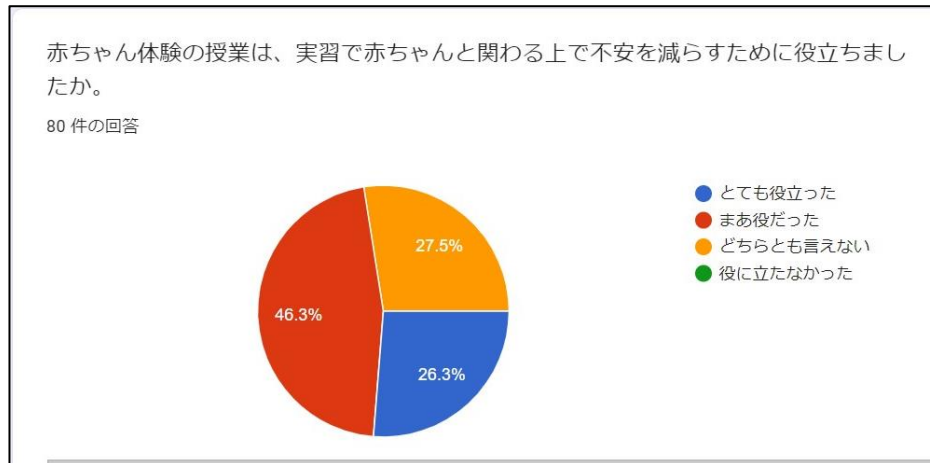


図 1 体験授業後の学生の感想

とても役に立ったが 26.3%、まあ役に立ったが 46.3% どちらともいえないが 27.5% であった。

7 割以上（72.6%）の学生からこの授業が役に立ったと回答があり、役に立たなかったと回答した学生はいなかった。一方、約 3 割の学生が、どちらとも言えないと回答していることから、学生は不安を抱えつつも「乳児保育」などの授業を通して赤ちゃんに対する理解を深めていることから、この体験授業だけではなく、カリキュラム相互の関わりが学生の赤ちゃんに対する不安軽減につながっていると推察される。

#### 5)、アンケート調査から

赤ちゃんのイメージに関する肯定的なイメージのポイントが高いことと、否定的なイメージのポイントが低いことから、多くの学生は赤ちゃんに対して肯定的なイメージを持っていると考えられる。しかし、実際に赤ちゃんの世界の体験をすることで肯定的なイメージのポイントが低下し、否定的なイメージのポイントが上昇することから、体験により考えていた以上に赤ちゃんの世界で過ごすことの大変さに気づいたのではないかと推察される。

実習後の結果からは、赤ちゃんが抱えている思いを実際に体験し、赤ちゃんへの理解を深めてから実習に臨んだことで、多く（7 割以上）の学生が赤ちゃんとの関わりで不安が軽減したのではないかと考えられる。

#### （2）体験授業後の学生の自由記述

仰向け、お座り、ハイハイ、立って歩くの 4 つの姿勢を体験した体験授業後の感想を以下に記す。

##### 1)、仰向けで寝ている時の感じ方や気づきの違いについて

- ・天井しか見えない。
  - ・視野が狭く、視線が低い。
  - ・お母さんが見えなくて不安。
  - ・動きたくて苦しい。
  - ・お母さんが上からのぞき込んでくれた時が嬉しかった。
- 2)、お座りの姿勢時の感じ方や気づきの違いについて
- ・仰向けに寝ている時よりは視野が広がった。
  - ・動きたいけれど動けない。もどかしい。
  - ・お母さんを見つけやすくなった。
  - ・お母さんが見えるので、不安が少なくなった。
  - ・後ろが見えない。など
- 3)、ハイハイができるようになった時の感じ方や気づきの違いについて
- ・好きなように動けて楽しい。行動範囲が広がった。
  - ・動けることに感動した。
  - ・周りが良く見えた。一気に見える範囲が広がった。
  - ・自分からお母さんに近づくことができ、世界が変わった。
  - ・頭が重いと感じた。など
- 4)、立って歩けるようになった時の感じ方や気づきの違いについて
- ・視線が高くなり、視界が広がった。
  - ・周りを見渡すことができ、お母さんを見つけやすくなった。
  - ・自分のいきたいところへ行けて嬉しい。
  - ・足取りが安定しないため、両腕を伸ばしてバランスをとる必要性を感じた。
  - ・自分が大きくなったように感じた。など

赤ちゃん役の学生からは、

「最初は動けなく喋られないので怖くて不安だった。」

「周囲の状況がわからない不安や恐怖が一番最初にあった。」とコメントがあり、赤ちゃんがいかに怖い思いをしながら日々を過ごしているのかに気付く貴重な機会になったと推察する。一方、「仰向けで寝ている時が最も情報量が少ないために、一番不安を感じた。そのような時に、お母さんの近づく気配を感じて、実際にお母さんが顔を覗き込んでくれた時には大きな感動があった。」と、不安から安心に心が動いた様子を伝えるコメントも寄せられた。

仰向けで寝ている姿勢時、お座りの姿勢時、ハイハイができるようになった時、立って歩けるようになった時の4つの姿勢を体験したことで、視線の低さや視野の狭さなどの我々の日常では感じることはできない貴重な赤ちゃんの世界を体験できたと推察する。

## (3) 保育実習終了後の自由記述

赤ちゃんと対峙しての感想の内容を以下に記す。

## 〈肯定的な内容〉

- ・かわいい。
- ・自分の意見を持っている。
- ・実習前は関わるのが怖いと思っていたが、それはなくなった。
- ・優しいと感じた。
- ・自分の想像より発達していた。など

## 〈否定的な内容〉

- ・どう対応してよいかわからなかった。
- ・緊張した。
- ・難しかった。
- ・食事や排せつの援助が怖かった。
- ・かわいいけれど、怖さもあった。など

感想としては、概ね「小さくてかわいい」など、かわいいで始まるコメントが多かった。保育士を目指す学生ということもあり、恐怖心を抱きながらも幼い子どもとの関わろうとする学生の意思と意欲が垣間見られた。

## IV、まとめと今後の課題

本研究では、保育実習前に学生が赤ちゃんと抱く不安を少しでも軽減するための取り組みとして、学生自身が伏臥位・座位・ハイハイ・歩行などの赤ちゃんの成長段階を実体験する。この体験から、赤ちゃんの発達過程における感覚や思いに気づき、赤ちゃんの視点で世界を捉えることで、より共感的に赤ちゃんを理解する力を向上させることを目的に授業を実践したことにより、以下の結果を得た。

- 1 1時間の模擬的な体験授業であっても、赤ちゃんの発達過程における動きや周囲の環境を体験することにより、赤ちゃんへの理解がより深まった。
- 2 赤ちゃんの発達に応じた姿勢を自身で体験することは、日常の生活では当たり前すぎて意識に上ることのない感覚器官の繊細な働きを再認識させ、赤ちゃんの抱いている思いや世界を鋭敏に体感させることにつながり、赤ちゃんに対してより共感的になった。
- 3 赤ちゃんをより共感的に理解することで、赤ちゃんへの不安が軽減され、結果として実習への不安軽減へとつながった。

以上のことから、本研究により保育実習前に学生が赤ちゃんと抱く不安を少しでも軽減するための取り組みとして、一定の知見を得ることができたと考える。しかし、本研究では自由記述で得られた学生の内面の変化についての検証は課題となった。

今後は、学生の授業における子どもの発達に関する知識の習得はもちろんであるが、自らの身体で体得する感覚の世界を広げることで、赤ちゃんや子どもの抱えている思いを共感的に捉える力をより向上させたい。そして、学生が不安を抱えることなく実習へと向かえるように寄与したい。

#### 謝辞

本研究の調査に快く協力いただきました富山短期大学 幼児教育学科 1 年生のみなさん、ならびにご助言を賜りました富山短期大学 幼児教育学科 准教授 嶋野珠生先生に、心より感謝申し上げます。

#### 注釈

注 1) 金子 (2005b, pp.10-11) は〈気配〉を始原身体知の一つの能力〈気配感能力〉として「気配感能力とは、方向不定の志向性である〈気配〉を感じ取ることのできる体感身体知の一つ」とあるとしている。詳しくは、身体知の形成 (下) を参照願います。

#### 参考・引用文献

金子明友 (2005) 身体知の形成 (下) .明和出版

嶋野珠緒・塩見一成 (2023) 「赤ちゃんの運動発達の体験的理解を促す授業の試み—『子どもの運動』と『保育の心理学』の協働授業実践報告①—」日本保育学会第 76 回大会ポスター発表抄録集, pp.669-670

鈴木・中本 (2005) 幼稚園教育実習に関する研究(1)実習前の不安感について.埼玉純心女子短期大学研究紀要, Vol.21, pp.39-44

田中伸介 (2009) 発達がわかれば子どもが見える.株式会社ぎょうせい

花沢成一 (1992) 母性心理学.医学書院

東俊一ほか (2003) 施設実習における実習生の目的・課題意識と学習内容に関する研究.保育士養成研究 Vol.20, pp.25-40

勝木・日坂・大和 (2014) 保育者をめざすあなたへ 子どもと健康第 2 版.株式会社みらい